

## 1930年代の都市近郊農家にみる跡取り 16歳時の選択とその帰結 福岡県下 6農家の事例分析

前田尚子 (名古屋市立大学)

### 【課題】

1930年代は、昭和恐慌とそこからの回復そして戦時統制経済へと向かう時期であり、農家経済にとって激動の時代であった。こうした時代状況のもと、農家はどのような経営上の対応を試みていたのか、それは家族労働力の配分とどのように関わっていたのか。こうした問いに取り組むにあたり、ライフサイクルという視点はきわめて重要である。農家を労働組織としてみた場合、ライフサイクルによる労働力の変動という不安定要因に加え、世代交代という課題も抱えているからである。当時の農家は、家族内の変動に対応しつつその再生産を図り、他方で、めまぐるしく変動する市場に対応していくという難題に取り組んでいたのである。本報告では、農家の周期的律動のプロセスのうち、跡取りが数え年16歳(高等小学校卒業直後)の時期、いわゆる「貧乏の峠」を越えて労働力拡大局面へと移行していく時期の農家の対応に注目する。

### 【方法】

農林省第3期農家経済調査(1931年~1941年)の対象となった福岡県の17農家の事例分析を行った(対象農家の詳細については前田2021を参照されたい)。この調査は、パネル形式による簿記調査で、労働時間調査も併せて実施している。そこで、経営収支と労働配分を相互に関連づけながら生活史を描き出すという方法により、各農家の戦略的対応とその帰結の析出を試みた。今回は、跡取り16歳の時期を含む6農家の結果を中心として報告する。

### 【結果】

跡取り16歳時の農家の対応は、階層によって異なる。

- ・小作・自小作農家では、土地を借り入れて耕作地を拡大していた。また、同じタイミングで、世帯内分業関係の再編(世代交代)も進められていた。
- ・自作・自小作上層農家では、跡取りを進学させるという選択もあった。この場合、世帯交代が遅れるため、労働力の不足をどう凌ぐかという課題が発生する。これに対して、外部労働力の導入のほか、経営内容の見直しによる労働節約や家事労働時間の切り詰めといった対応がなされていた。

他方、1930年代の福岡県では、農家経済に重大な影響を及ぼす出来事がつぎつぎと生じていた。恐慌による農産物価格の暴落、旱魃被害、炭鉱陥没による農地荒廃、戦時経済下の農産物価格の急騰などである。そのため、借入地拡大という選択の成否は、これらの歴史的出来事とのタイミングによって大きく左右された。また、医療技術ならびに医療保険制度が未発達で青年の罹患リスクが高かった時代ゆえ、進学した跡取りが夭折するという事態も生じていた。

### 【結論】

跡取り16歳時は、農家経営にとってチャンスが拡大していく時期である。各農家は、比較的長期的な展望のもと、階層的・地域的条件に応じた家族戦略を展開していた。しかし、歴史的にみれば、1930年代の農家は激しい経済変動に翻弄されており、また医療制度の未整備ゆえに生死にかかわる病に罹患する者も少なくなかった。こうした経済的・人口学的条件のもと、各農家の家族戦略の成否は偶発的な要因によって大きく左右されたのである。

前田尚子, 2021, 「1930年代の都市近郊農家におけるライフサイクルと家族戦略: 福岡県下 13 農家の事例分析」  
『家族社会学研究』33(2): 183-203.

(キーワード: 小農世帯、家族戦略、ライフサイクル)